追憶の交錯 - 0715

E組　尾澤 伸一

クラスの纏め役・西澤君が卒業写真をメール送信してくれた。懐かしいスナップだが、私の左右に座る大島君と笠井君は故人である。思わず見入ってしまうが、中心の渡邊三郎先生（我々の愛称は＝さぶであった）も若く、ズラリ並ぶ40人は少年の面影が残っている。遠い“半世紀”前になるおぼろげの記憶の断片が交錯して来る。

当日の西澤君の報告で､E組の参加者は11名で多数参加組に入るようであった｡くじ引き席割りが５番となり、クラスの笠原君と宮本君と3人が一緒になった。当然ながら、先ずはクラスの回想から始まりである。

おぼろげの記憶は両氏との会話で少し鮮明となるような気持になるから不思議なものだ。おぼろげの記憶の整理を行なっているようなことにふと気付かされた。笠原君も宮本君も三郎先生の人間像を回想した。口より早く鉄拳が飛んできた事、個性的な数々の“三郎語録”などを思い起こした。何時だったの定かでないが、私も成績のことで、「お前、もう少し身を入れてやれ！」と叱責されたこと、自分の勝手な思いと現実の有様を「空の星を竹竿で落とすことはできんぞ！」との名セリフに私は参ったものだ。正に反論の余地なしであった。

実は、私の高校時代の思い出は苦いものだ。1年の秋半ば、バスケ部の練習で風邪をこじらせて肺浸潤になってしまった。当時バスケ部には、高橋（伝）さんというキャップテンがいて小柄だが素早いプレーは見事だった。思い出話になるが、私は脚力に少し自信があったので夏合宿頃から先々のプレー目標は（伝）先輩だなとひそかに思い始めていた。風邪気味でも練習をこなしていたが、相当咳き込むようになり、相沢病院に駆け込んだ。小田多井先生から､油断するなと相当厳しい忠告を受け､止む無くバスケを断念した｡ささやかな夢の挫折である。

幸いにも普通生活はできたが、この挫折は後を引いた。今様に表現すればやる気・意欲の喪失で成り行き任せの生活を1年位過ごしたのだろうか？バスケにのめり込んでいた頃は、帰って飯を食べ寝るだけ、病を得てからは意欲後退で2年の年末までノンポリということだろうか？方針は国文をベースに考えていたが、3年になった春、あろうことか今度は親父が病を得て相沢に3-4ケ月の長期に及ぶ入院となり、通学の行き帰り洗濯物を届けたり受けたりの生活も続いた。貧しい時代で家庭内経済の行き詰まりが私にも押し寄せて来た。とても浪人することのできない環境になり身を入れていないツケが回ってきた。お袋のこぼす説明は実に堪えた。就職を含めての全方位外交の始まりである｡止むなく夏､三郎先生に相談し就職担当の遠藤先生に助言を求める展開になった。

遠藤先生から「こんな処から求人は来ているが、やってみるか？」という軽いものだった。希望（目標）が曖昧というのか無いか、助言される処を片っ端から試みないと浪人不如意を解消できない切羽詰まる気持ちだった。春の経過観察で「少し影が残っているがまずまずかな？」と小田多井先生に言われていたが、最終となる健康診断結果の内定通知にやきもきしたものだ。こうした経緯が40年お世話になった某旅行会社との関わりである。

遠藤先生の痛烈な言葉を懐かしく思い出す。内定を受けたので報告に行き、大学受験もやってみたいと付け加えたところ、「お前は後輩の道を閉ざすつもりか！」と返されてしまった。三郎先生と同じように反論の余地はなく、白旗を掲げることにした。40年の会社生活のゲートも卒業写真の奥行きに在ることを改めて思い出す。

二次会は、特に永原君と盛り上がってしまった。バスケ部で暫く一緒に過ごしたが、話題は更に広がり、彼の中学時代まで遡るようなことにもり、実に愉快な追憶タイムを過ごした。再会を約し、ほろ酔い気分で帰る。

やはり、Eクラスの面々に三郎先生の人物像は魅力に映るようだ。何時だったのか？東京同窓会に上京して来て、「アルウィンの建設資金に協力しろ」と口説いて回っていた姿を思い出す。皆、今の山雅の活躍を見て欲しかったと思うのではないか。そして、もしかしたら、三郎先生は山雅出身でA代表を張りワールドカップで活躍する選手を輩出することを夢見ていたのかも知れないということを想像してしまう。人間＝渡邊三郎の纏めには、再度の集まりの機会が必要になりそうだ。

羽重君、西澤君、お誘いありがとう。労いの言葉を添えます。